

近代東アジアにおける政治思想の形成と西洋——周縁のキリスト者の場合——

陶 徳 民

本パネルセッションは、中国洋務運動のなかの王韜、朝鮮獨立運動のなかの安昌浩、琉球文芸復興運動のなかの伊波普成という三人のキリスト者を取り上げ、近代日本の周辺で繰り広げられた伝統的儒教思想と西洋近代思想の融合および新しい世界観とアイデンティティの形成の諸相を解明しようとするものである。報告者は陶徳民（関西大学、井上厚史（鳥根県立大学）および一色哲（甲子園大学）、コメントーターは高橋文博（岡山大学）という構成である。

第一報告「王韜の西洋観—文明、帝国主義およびキリスト教—」（陶）の概要は次の通りである。王韜（一八二八—一八九七）は若くして蘇州地方の生員にはなれたが、南京での郷試に落第した。上海移住後、亡父の後継者として墨

海書館（倫敦布道会所属）のW・H・メドハーストの新約聖書漢訳事業の助手となり、一八五四年、二七歳の時に洗礼を受けた。一八六二年太平天国とのかかわりで清政府に指名手配されたため、香港に亡命し、英華書院（同じく倫敦布道会所属）院長J・レッグの五経英訳事業の助手となった。帰省中のレッグに追隨する二年半の間（明治初期にあたる）は、イギリスやフランスの文明社会を広く見聞した。一八七三年香港の有志と中華印務総局を設け『循環日報』を創刊した。その数々の論説と名著『普法戦紀』に現れている豊富な世界知識と鋭い国際感覚は日本の有識者たちに買われ、一八七九年に約四ヶ月間の日本訪問に招聘された。晩年、李鴻章の了承のもとでようやく上海に戻ることができ、

格致書院の院長を務めると同時に『万国公報』と『申報』の關係者として活躍し、その改革の主張は康有為と孫文に尊重された。

王韜の思想の特質は、その道器論と天人論による世界大勢の把握およびその「万国公法」・「額外利権」（治外法権）批判に現れる民族独立の精神、という二点にある。彼によれば、西洋発の機械文明は世界中の国々の交通と人々の交際をもたらし、天下「合一」の機が将にここに兆す。夫れ民は既に分より合になれば、則ち道もまた将に異より同になる。形而上の者は道と曰き、形而下の者は器と曰く。道は即く通ずる能はざれば、則ち先ず器を仮りて以てこれを通す。火輪舟車、みな以て道を載せて行ふところのものなり」（「原道」）。そのため、洋務運動は避けられないものであり、中国三千年の文化伝統を脅かす西洋文明の東漸を中国の変革の好機と捉えるべきだそうである。

他方、王韜は西洋列強の植民地主義と明治日本の膨張政策に強い危機感を持ち、イギリスのインド支配、フランスのベトナム進出、「琉球すでに沖繩と改む、高麗の危き果卵の如く」、アジアの将来は「未だ知る可からざるなり」と悲嘆している（「亞洲半属欧人」）。このような弱肉強食の現実を鑑み、彼は新しい国際関係のルールとされる『万国公法』の本質を次のように鋭く指摘している。「蓋し国が

強ければすなわち公法は我れ得てこれを廢し、また得てこれを興すべし——国が弱ければ、すなわち我れ公法を用いようと欲すとも、公法は我れのために用いられず」と（「洋務」）。また、彼は不平等条約による治外法権の適用についても強い抵抗を感じた。「夫れ額外利権、欧州に行はれず、而して独り土耳其、日本と我が中国に行はれる。是の如くならば、すなわち中土（中国）に販售する西商、ないし伝道の士、旅処の官（中国駐在外交官）に、苟も或いは事有れば、我が国悉くこれを治むる權無し」と（「除額外利権」）。このように、ユニークな経歴で東西宗教思想交渉の先端に位置し、文明と覇権という近代西洋の二面性を見抜き積極的な対策を提唱した王韜は、十九世紀東アジアの代表的知識人の一人と言えるだろう。

第二報告「安昌浩の「天」の思想とキリスト教」（井上）の概要は次の通りである。「韓国独立運動の父」として知られる安昌浩（一八七八—一九三八）は、十六歳でキリスト教長老会に入会し、アメリカ人宣教師H・G・アンダーウッド創立の救世学堂に学んで独立協会運動に参加。一九〇二年に渡米して在米朝鮮人運動を指導したのち帰国し、新民会・大成学校の創設など愛国啓蒙運動を主導した。一九一九年の「三・一運動」が勃発後には、上海に渡って大韓民国臨時政府に参画し、内務総長、労働局総弁を歴任。独立

運動のなかで民族近代化の必要性を訴え、民族の精神革命をも強調した。安昌浩にとって、西洋キリスト教との出会いは、亡国の危機に瀕する祖国を近代化し、国権を回復する原動力を導き出す思想的源泉の発見を意味していた。

しかし、彼の政治思想は、そのキリスト教的背景から想像できないほど、伝統的儒教思想と強い親和性を保有するものであった。その時々で発した救国の言説は、つねに「天」と「誠」によって特徴づけられていると言っても過言ではない。たとえば、一九〇七年の新民会創設にあたり、「半死の若き心を以て事為上に尽力すれば、天下何事をか做し去る能はざらんや」と述べ、必死に努力すれば「天」は必ず救済してくれると説いている。一九二〇年の興士団結成時には、『中庸』に、誠なる者は天地の道なり、誠なる者は人の道也といひ、また誠ならざれば物無しと言っているが、誠とは真である。天地は真によって維持されているゆえに、一度真が壊されれば天地は即刻破壊されるだろう。(中略) 国もそれと同じで、あらゆる官吏やあらゆる人々が全て真を遵守する間は、決して亡びないはずである。その反対に、この中のどちらか一方が真を捨てて偽りの道に行けば、もはやその国は混乱に陥ることだろう」と述べ、『中庸』を根拠にして、天地や国の秩序がいかに誠＝真によって維持されているかを力説している。こうした「天」

や「誠」の解釈は、実は、韓国儒教独自の天人理解に基づいている。韓国では、天人関係を天の根本的な特性が人間の心性の中に内在しているという認識構造として理解することが一般化しており、「天道と人道は一貫しており、宇宙の根本は人倫道德の根源であり、人倫道德は宇宙の根本が流行し発現したものである」として、「誠」が宿る「心」に宇宙論的な意味を付与させる傾向がある。

安昌浩の政治的言説に関する以上の分析で明らかのように、韓国近代のキリスト教は伝統的な韓国儒教(あるいは「朝鮮心学」)の系譜上に位置づけられるものである。西洋列強や日本による帝國的支配が拡大する東アジアにあつて、植民地という辺境に追いやられた韓国で発達したキリスト教思想は、近代化の推進と祖国の救済を同時に達成しようとする困難な課題の解決に、「誠に徹すれば天は必ず救ってくれる」という宗教的希望を与えてくれるものであった。

第三報告「辺境のキリスト教と日本の近代」伊波月城とその周辺―(二色)の概要は次の通りである。月城・伊波普成(一八八〇―一九四五)は「沖繩学の父」伊波普猷の弟で、ジャーナリストである。一八九〇年に青山学院(メソヂスト派)に進学し、海老名弾正(日本組合基督教教会本郷教会牧師)による感化を受けてキリスト者となった。一九〇七年頃に帰沖し、兄・普猷とともに沖繩メソヂスト教会(村

井鏡牧師)で「沖繩正則英語研究会」を結成した。二年後に『沖繩毎日新聞』の記者となり、一九一二年頃まで同紙を中心に活発な言論活動を行っていたが、それ以降、忽然と斯界から姿を消した。一九四五年沖繩戦の最中に戦場死したと言われている。

沖繩へのキリスト教の到達は日本本土より早く、十九世紀半ば中国大陸に伝道していた欧米の宣教師たちは日本伝道のための「橋頭堡」として沖繩に一時的に滞在した。そして、日本での禁教が解けるとそこに殺到し、沖繩のキリスト教伝道は中断する。十九世紀末、本土から来た日本人牧師によって伝道は再開されるが、その意図は「文明の宗教」でもって新日本を建設しようとするキリスト教界主流派の国家主義的志向を体现するものであり、「沖繩のキリスト教」に対する「日本のキリスト教」への同化を促すものであった。そのような日本人牧師の姿勢に反発して自ら教会を設立した沖繩人・比嘉静観(一八八七—一九八五、ハワイに渡り教会を牧する傍ら労働運動を指導したことがある)および月城などが展開した琉球文芸復興運動は、辺境に位置する「沖繩のキリスト教」の別の可能性を示している。

たとえば、一九一一年四月の「河上肇舌禍事件」に際して、本土との同化を促進する立場であった『琉球新報』とは異なり、月城は「琉球人は小なる国家的観念より超脱し、

忠君愛国てふ狭隘なる家より進みて、真個国家の理念たる世界平和の理想に達せむとするは天の使命ならずや」「机上餘瀝」(『沖繩毎日新聞』一九一一年四月八日)と、河上の発言への熱烈な擁護を表明した。月城はまた次のように、アギナルドのフィリピン革命を支持し、朝鮮半島への日本の進出を批判し、南アフリカのボーア人やトルコ、ユダヤ、インドなど西欧列強の圧迫に呻吟する小民族に対して深い同情と連帯を示している。「且つて、あ、牡国」といふ詩を作って、トランスバールのために大気焔をはいて、クルーゲルを賞賛し、併せて類なき而非チェンバレンを罵倒した詩人があった。又比律賓のために千斛の涙を注いでアギナルドウの為に絶叫した詩人もあった。併し十年後の今日、日本の詩人が日本海の彼岸にへこたれてゐる極東の病人の為に一滴の涙さへ注いだことを聞かない」「感想録」(『沖繩毎日新聞』一九〇八年三月二七日)と。

ひとつの辺境は、他の辺境に最も近い。このように月城周辺の沖繩のキリスト教関係者からは本土のキリスト教界の国家主義による同化、教化や感化に塗り込められず、常に境界の外へと向かうエネルギーが満ちていた。

*本稿は報告者三人の協同作業によるものである。